Osaka University Knowledge Archive

Title	タイ現代文学の地平 : セーニー・サオワポン及びチャート・コープチッティ作品の位相
Author(s)	平松, 秀樹
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47084
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【３】

氏　　名	平　松　秀　樹（ひら まつ ひで き）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０６６３　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**タイ現代文学の地平－セーニー・サオワポン及びチャート・コープチッティ作品の位相－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　内藤　　高 （副査） 教　授　出原　隆俊　　教　授　柏木　隆雄 大阪外国語大学外国語学部教授　宮本マラシー

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、タイの現代文学を代表する作家セーニー・サオワポン（1918－）とチャート・コープチッティ（1954－）の代表作を取り上げ、タイの現代文学の特徴について主に実存主義的な観点から論じたものである。序章、第１章から第４章までの本論と補論Ⅰ、終章、補論Ⅱ、付録からなる 400 字原稿用紙換算で約 500 枚の論文である。

序章でまずタイ現代文学について研究することの意義、二人の作家を選んだ理由について触れた後に、第１章ではセーニーの代表作の一つ『妖魔（ピーサート）』（1954）を中心に論じられる。外交官でもあったセーニーは、美のための文学から離れて、社会、人間のための文学という立場を明確にした作家であり、農村出身の青年弁護士が停滞する旧社会に立ち向かっていく姿を描いたこの小説はまさにこの立場を反映している。こうした変革への意志が、仏教の業の思想の中に本来存在する、変化を求める自力（カンマ・リキット）の姿勢との関連の上で捉えられている。

第２章では、これもセーニーの代表作の一つである『ワンラヤーの愛』（1952）が取り上げられる。裕福な家庭で育った女性が、家庭に従属するための女性というタイの伝統的価値観からの解放を意識するようになる物語であるが、旧来の古典文学における女性像との対比、パリ留学という経験が果たした役割などを中心に論じられている。

第３章と第４章では、セーニーとはかなり性格の異なるチャートの作品に焦点が当てられる。第３章では『裁き（カム・ピパークサー）』（1981）という作品が取り上げられる。寺男の息子で修業に励み、僧侶としての将来を期待された若者が、父の死後、周囲の悪意ある風評の犠牲となって転落していく物語であるが、こうした状況に追い込んでいく「他者」の意味について主に考察がなされる。とりわけ申請者はサルトルの思想との関連の上でこの問題を論じており、類似点を分析した上で、出家の問題など仏教的な価値観の存在に相違点があることも指摘している。

第４章ではチャートの代表作『時（ウェラー）』（1993）が問題となる。60 代の映画監督が、学生たちが演じる養老院の一日の劇を見ながら、自分の人生や家族たちについて回想していく物語である。中心テーマは「老い」であり、そこに人を導いていく「時」であるが、老賢人的な老婆の存在を通しての「無為」の価値の認識など、単なる悲劇としての老いとは別の東洋的老いの意味が持つ可能性が強調されている。

このほか、補論Ⅰでは大江健三郎の「奇妙な仕事」などの初期作品が、チャートの上記作品との対比の上で実存主義的な観点から考察されており、補論Ⅱでは、文学と環境の観点からみたタイの現代文学、特にタィの東北部の農村を扱った文学が、都市のそれとの対比の上で論じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、まだ翻訳も少なく、日本で馴染みの薄いタイの現代文学について、代表的な作品を詳しく紹介し、本格的に論評した論文である。先行研究も少ない中で、タイ文学を研究することの意義を日本にも積極的に伝えようとした論文である。申請者は長期留学期間の他にも、しばしばタイに赴き、現地に密着した研究活動を行っており、セーニーやチャートに実際にインタビューして、それを論文に活かしている。こうした意欲的な研究姿勢は高く評価することができよう。またタイ一国の文学に閉ざすことなく、サルトルの思想との関係や大江健三郎の小説との対比など比較文学的拡がりもよく意識した論文であり、西洋の実存主義、仏教思想などについても日頃の熱心な研究の成果がよく現れている。いろいろ新しいことを学ぶことができる大変興味深い論文である。

とはいえ、博士論文としては、やや性急に書かれており、分析や論述の仕方にさらに注意深い考察や推敲が必要だった点も見受けられる。例えば章の配置の問題で、申請者は、時間的には後に書かれた『妖魔』を第１章、先行する『ワンラヤーの愛』を第２章で論じているが、この配置はあまり有効ではなく、年代順の方がセーニーの文学的変化や深化がよく理解できるように思われる。また単独の論文を併置した印象があり、一つの博士論文としてまとまりがやや弱い。さらに、補論とはいえ、大江とチャートの対比の章では、申請者はチャートに関してはほとんど第３章と第４章の文章をそのまま再利用しており、大江の文学との対比の軸を明確にした論として再構成する必要があろう。大江の側に関しても、この観点をさらに明確に意識したテキストの読み込みが必要であったように思われる。

また、余りに素朴な理想主義的印象も受けるセーニーの作品が、タイで大いに評価された歴史的社会的背景はさらに充分に説明する必要があろう。タイの同時代の他の作家が描く女性像との比較もあると面白い。さらに、作品の伝えようとする思想だけでなく、文学表現そのものにももっと注意を向けた方が、文学的特質はよく理解できよう。タイトルの言葉が含むニュアンスなどについてももう少し原語に即した説明があってよい。その他、論文の日本語表現や外国語の綴りなどにややミスがあるのも残念な点である。

とはいえ、こうした問題点は、タイ語とタイ文学についての深い知識に支えられ、これからの発展の可能性を大いに持った本論文の価値をいささかも損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。